

CeMI 気象防災支援・研究センター

News Letter

Contents

1. 菜種梅雨(なたねづゆ)
2. ホットスポット
3. お天気よもやま話 ~ 降水確率について



1 菜種梅雨 (なたねづゆ)

「菜種梅雨」とは、菜種の花が咲くころの3月から4月頃に曇りや雨が続き、梅雨のようなぐずついた天候が続くことをいいます。

「梅雨」とは言っても、6月頃の梅雨のようにずっと続くということではなく、数日から一週間程度のことがほとんどです。冬から春にかけて季節が進んで行く中で、冬の冷たい気団と春の暖かい気団が日本付近でせめぎあって前線が停滞しやすくなることで、「梅雨」のような現象となるのです。東日本から西日本にかけては、冬場は西高東低の冬型の天気となることが多く、晴れの日が続くことが多いですが、菜種梅雨になると天気がぐずついてしまいます。春に向かうサインと言っても良いのではないのでしょうか。

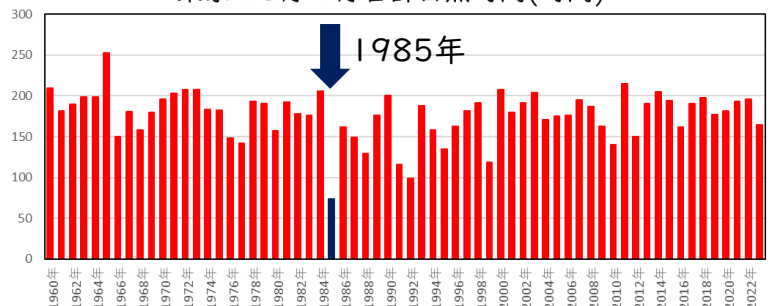
また、この時期には、暖かくなり始めていますので、草花や農作物への水分補給の効果もありますね。雨が降らないと渇水で大きな影響が出てきます。そういう意味では、「菜種」とついているのは農作物への恵みということもあるのかもしれませんね。

ところで、菜種梅雨が現れるのは、いつも同じような時期ではなく、早ければ2月下旬頃から本州南岸に前線が停滞してぐずついた日が続くこともあります。地球温

暖化の影響もあって季節の進みが早いことも考えられますので、今後は時期が少し早くなるのかもしれませんが。その分、菜種も早く咲くようになる？

さて、1985年3月は菜種梅雨が1か月間も続いた記録的な年でした。東京の月合計の日照時間の平年が175.3時間に対して、74時間(平年の42%)でした。下の図は1960年以降の東京の3月の日照時間のグラフです。1985年だけ青色にしていますが、極端に少ないのがわかるかと思います。0.5ミリ以上の降水があった日が月に17日もありましたので半分以上が雨だったわけです。もちろんこのようになることは極めてまれですのご安心を。

東京の3月の月合計日照時間(時間)





2 ホットスポット

テレビの天気予報で欠かすことができないもののひとつが気象衛星の雲画像です。台風に伴う大きな雲の渦は特徴的な画像ですが、気象衛星の雲画像では雲以外にも様々なものを見ることができます。

気象庁のホームページを見ると、気象衛星の画像にはいくつかの種類があります。可視画像は人間の目で見たままのように雲を写しています。また、赤外画像は雲などから放射される赤外線を観測して、それを温度によって白黒の階調やカラーで表しています。白黒の画像では温度の高い部分をより黒く、温度の低い部分をより白く表しています。気温の低い空の高い所にある雲は赤外画像では白く、低い所にある雲、例えば層雲などは黒っぽく見えます。雲のない所は地面や海面を見ていることとなります。画像を見慣れないと下層にある雲や地面付近に漂う霧の判別がつきにくいのは、地面や海面との温度のコントラストが不明瞭なためです。

赤外画像は温度を利用して可視化していることから、雲とは別に興味深い現象を見ることがもできます。そのひとつが「ホットスポット」です。言葉からも何となくイメージ

が湧くと思いますが、これは赤外画像の中の限られた場所で周囲に比べて特に温度の高い所です。代表的なものが山林、原野などの火災と火山の噴火に伴うものです。火災の煙や噴煙は大規模なものであれば、可視画像でも見ることができますが、夜間には見ることはできません。一方、赤外画像は昼夜の区別なく、24時間連続して監視することができます。

火山の噴火口の温度は極めて高いため、大規模な火山の噴火であれば、火口付近がくっきりと黒く見えることがあります。また、火災の場合にも広い範囲に火災が広がっている場合には、火山噴火より広範囲に温度の高い部分が黒く、ホットスポットとして現れます。これからの季節、5月頃にかけてはシベリアや沿海州などでは雪や氷が消えて、山林や原野が急速に乾燥してくるため、毎年のように大規模な火災が起こります。上空に雲があれば地面の様子を見ることはできませんが、雲のない時を見つけて、日本から北の方角、シベリアや沿海州にも目を向けてみてください。赤外画像でホットスポットが見つければ、日中、可視画像で上空に広がる煙を見ることがもできるかもしれません。

3 お天気よもやま話 ~降水確率について



1980年から提供されている「降水確率」。知名度は高いのですが、確率情報の性質ゆえに誤解も多いように思います。

降水確率は主に過去の統計を基にして計算しています。例えば

「降水確率30%」とは、過去の気圧配置などと照らし合わせ「同じような気圧配置やその他の気象条件が10回現れたときに、雨または雪が3回降った」ということです。逆に10回のうち7回は降らなかったということですので、それをどう考えるか？は、みなさんそれぞれのご判断によります。ちなみに、個人的には、日本では降水確率30%以上の時に傘を持って出かける方が多いように感じています。

降水確率でよくある誤解が「10%より80%の方が強い雨が降る」というものです。雨や雪の降る強さや量は関係ありません。また、降水確率は「1ミリ以上の雨や雪の降る確率」ですので、「1ミリ未満の雨や雪」がちらっと降る

こともあります。さらに、降水確率は四捨五入して0%、10%、20%…というように10の倍数で表すため、0%といっても実は5%未満の確率かもしれず、雨や雪が降ることが起こりえてしまうのです。

発表対象区域がそれなりに広い、ということも誤解を生む要因です。例えば神奈川県でいうと、明日までの降水確率は東部と西部の二つに分けた区域を対象に発表されます。そのため「たまたま自分のいる横浜市は降らなかったが、同じ東部の三浦市では1ミリ以上の雨か雪が降った」ということが起こります。

そんな少しややこしい降水確率ですが、天気の大まかな傾向をつかむ参考になります。例えば天気予報で「くもりのち雨」の予報を見た時、私は降水確率が高まる時間帯を探し「今日は夜遅い時間帯の方が雨が降りやすいのだな」などと傾向を掴んでいます。雨の降り出すタイミングをもう少し絞り込みたい時は、気象庁の「今後の雨（解析雨量・降水短時間予報）」という情報も参考にしています。



掲載内容へのご意見、そのほかサービスに関するご相談・ご要望等ございましたらお気軽にご連絡ください。

NPO法人 環境防災総合政策研究機構(CeMI)

気象防災支援・研究センター

〒160-0011 東京都新宿区若葉1-22ローヤル若葉606号

<http://www.npo-cemi.com/center.html>

☎ 03-3359-7971

☎ 03-3359-7987

✉ advisory@npo-cemi.com

